

らしたのか、相手方を欠場としてしまったのです。念願の上位独占とはいっても、何か損をしたような気分だったので、一応優勝チームを決めて下さいということで、盛り上がりがない決勝戦が行なわれたのです。こういった次第で初の団体優勝を成し遂げたのですが、表彰式は後日ということで、結局我々は修学旅行に、そして他に誰も受け取りに行かなかったのです。

当時、西高の集会では、クラブが賞状をもらうと全校生徒の前で発表されたのですが、ある日の集会で、都立戦の小さなカップが他の運動部の大きく立派なカップと並んで、校長から紹介されました。隣りのカップに比べて貧弱に見えるカップを見て、恥ずかしいような気分だったので、更に、顔を張られた様なショックに襲われました。

隣りの大きいカップは、バレー部の杉並区民大会優勝カップだったのです。



無題

二十二期生 白木 哲夫

仰けから恐縮なのですが、TVで『黒の50』ですか、『G&G』ですか、黒人が実にリズムカルに踊っているコマシヤルがあるのを御存知でしょうか？ 関節がカクツカクツと折れ曲がるのですが、それが云わゆる「きまってる」と言う表現がピッタリでして、それでいて彼等の肢体はリズムそのものなのですが、あれは私のようにギコチない身体の持ち主がやってみると、なかなかうまくできないもんでして、あんな風に肢体が律動したら喜ばしいであろうに、と嫉妬しているんですが、このように恵まれぬ身体の私でもかつてそれが躍動した記憶がありまして、それは卓球を通じてなんです。

西高卓球部の歴史をひもとけば、強い奴も強くない奴も、うまい輩もそうでない輩もおりまして、そんな人々がその歴史を織りなして今日に至っているのですが、私はそのでない方に属す一人なのですが、それでも卓球をやっている時に何度かこう私の肢体がリズムカルにしてスピーディーに律

動した瞬間がありました、その瞬間はなんとも喜ばしい瞬間でしたね。そういうことが続くと、自然と頬が弛んでままして、引き締めるのに苦労しまして、まあ、これが私の限界を示しているとは言えますが……。

これは、卓球部にいた当時の思い出の断片のひとつなのですが、高校時代の思い出と同じように、それらの断片は、日だまりの中や物陰に散乱して、鋭く輝いたり、しっとりとした皮膚の感触を伝えておりまして、多かれ少なかれ、私達の代の人々もそんな中で練習に励んでいたんじゃないでしょうか。

バレー部がたいいてい照明のひとつを破損して、私達の勘を養わんと協力してくれる絶好の環境下で目を凝らして白球を追いつつ、内輪揉めを起こしたり、他の高校の立派な体育館で我等が選手を応援し、暑い昼下がりに井の頭まで走り、練習が済んで目の出屋でたむろして、中には遅れて海坊主（失礼！）にこずかれたりする奴もでて、なんやかやとゴチャゴチャと、私達の先輩がやってきて、又、後輩もやったであろうように、やっておりましたね。

私事から始めて手前味噌な御託を並べたてましたが、物について、と云いますので、厚かましくも、西高卓球部のある時期を織り成した、我等が代の無名選手の横顔を、はなはだ無責任な態度でここに刻み、この稿を終えることにいたします。

まずは、団結固き女性軍から初めますと、おしとやかな渡辺さん、ツキツキの切れる塩出さん、辛抱強くカットをする大木さん、フォアサイドを切るスマッシュユルかししないと云う名人技？ の持ち主の森山さん、次に野郎共はと云うと、フォアへ押しぎみの速いツツツキをするのを趣味とする横井、それを狙い打つのをこれまた趣味とする渡辺、ていねいな攻めをする生真面目な河村、ロングサーブをだす時中風のよりに手が震え、いつくるのか解らぬ坂井、ドライブが入らなくなるとしきりに頭をかしげだすおっとり刀の山本、3球目、レシーブ、とすぐ打ち何もさせたくない道正……と、まあこういう人々が、風が吹くと球筋が変わる体育館の中で白球を打ち続けていた時期があったわけなんです。

現在、西高にも立派な体育館が設置され、そこで、私達のような無名選手の諸君、あるいは、有名選手の卵の諸君が練習に励み、鍛え、肢体を跳躍されていることでしょうが、諸君がこの日々をよりハッピーに精進し、健闘されんことを期待しております。